

非日常の距離

非日常なんてことは、季節の変わり目に頭が柔らかくなった奴らが、初りとどうでもいいことを両陣して、実行に移してしまっただけから発生することであって、普通に考えれば、博麗霊夢を取り囲む環境というものは、基本的にはまったりとしたものである。

「うん……もう朝？」

明らかに寝不足で、気だるい肢体を持ち上げ、霊夢は名残惜しくも、布団から這い出ることにした。

昨夜、どうみても幼女な鬼の伊吹萃香が、夜な夜なやってきて、宴会をおっぱじめた。

わざわざ布団まで敷いて、夜間着に着替えた霊夢は、その布団を指加えてみていることしか出来ずに、宴会に巻き込まれた。

小規模ながら宴会は、酒池肉林を極め、普通に食う黒の魔法使い、霧雨魔理沙が無謀にも草香に飲み比べを挑み、完膚なきに負けるまで続いた。

その時間、午前一時、健全な少女達が起きている時間は、はるかに超過していた。誰もが寝静まった頃に、仕様がなく霊夢は適当に、兵ならぬ、酔っ払いの夢のあとをさっさと片付ける

と、これまた今度は本当に酔っ払いを、門前までぶっ飛ばしてから、布団に入るのが午前二時。そして今は午前六時を回った頃。

正直、少女のお肌と健康には、程よい睡眠時間ではあるが、ここはいくらも面が年中春といわれている霊夢でも、巫女の端くれ、決まった時間に起きて、巫女らしい何かをするのは、至極当然である。

「うー面倒くさい。朝起きたら、勝手に御飯が出来てたりしないかな」

などと、朝も早くからテンション低い独り言を、ぶっぶっ口ずさみながら、朝食の準備に取り掛かる。

特に、食材が豪華なわけでもなく、作る際にも工夫も何もあつたものじゃない、本当に普通の白米に、味噌汁に、焼き魚、精進料理みたいな朝食を魔理沙みたいと思いつながら、霊夢は黙々と作り続ける。

「お味噌汁のお味は……うん、我ながら普通ね」

程なくして完成を迎える朝食。

「いただきます」

そんな普通の朝食を何も感銘を指かずに、食べる。作る時間が、もったいないぐらいの速さ

で、おなかの中に収まった

「ちそうさま」

食べ終わって、食器を片付ける。

いい加減寝巻きもどうかと思ひ、他人からすれば同じようにしか見えないが、実は少しずつ些細な違いのある巫女服に着替えると、それだけで、やっと博麗霊夢の一日が始まったような気がした。

とりあえず始めに、引きつばなしたった布団を日光浴させて、次に掃除、畳をはいて、廊下は雑巾がけ。我ながら、甲斐甲斐しい事をすると思ひながら、外を叩く。

日が程よく上がった頃には、とりあえずやることはなくなっていた。

「労働の後のお茶は格別ね。寝不足の体にはいい薬よ」

一口すすって、大きく息を吐く。喉を通る心地よい熱さに、顔が緩んだ。

「まったく、おまじで冷えた体には、本当によく染み渡るぜ」

「あらいたの？ というか、まだいたの？」

実際、お茶を飲み初めるときから、魔理沙がいることには気付いていたが、あからさまに、今気付いたような素振りをした振りをする霊夢。

「今起きたばかりだから、気付けば、一人一段で、硬い石の布団で寝かされていた。私にはもったいないぐらいの立派なやつだったぜ。なにせ、百段ぐらいあるベッドだ。ひとたび落ちたら、奈落まで無料でいける、贅沢なベッドをありがどうよ」

「あら、喜んでもらって辛いね。わざわざ運んだ甲斐があるから」

「ほあ……もういいよ。とりあえず、お茶をもういっぱいくれ。まだ体が冷える」

なにが「お前の能力は皮肉すらも飛び越えるのか？」みたいなことを、言いたそうなのだが、魔理沙本人も皮肉を受ける側の人間なのだから、これ以上言っつのをやめたらしい。

「はいはい、どうぞ。それで、ほかのみんなは？」

お茶を出しながら、霊夢は訊ねる。

「ん？ あーほとんどいなくなつたぜ。私が起きたときにはな、私より早く起きたか、お前に追い出された時点で帰つたか、だろ」

普通なら、追い出された時点で帰るものだ。

しかし、そのまま寝続けられるのも、ある意味才能だと霊夢は思う。まず転げ落ちなかっただけでも、奇跡のような寝相の良さだ。

普段からそんな風に寝てくれてさえいれば、もう少し泊めてやろうか、という気分になれるのに。

「まあいいなくても、落ちても落ちなくても、私は関係ないけど」

本当にどうでもよきように、雲夢は立ち上がり、部屋のほうへ戻っていく。

「おい、落ちたらだめだよ。つてどこいくんだ？」

「本職のほうよ。たまにはこうやって妖怪を、余計なことを考えられないように締めつけてるの」

「巫女じゃなくて、妖怪退治が本職って言うのは悲しいね、いくらお寶銭が入らないからって、霊能を妖怪で暗らしにいくなんで、容赦がないというかなんていうか……あうっ」

魔理沙の顔に、御札がべったりと垂られ、その勢いで魔理沙は地面へと落ちて、雲夢の視界から消えた。あとは悲鳴と、苦痛を訴える声だけが、虚しく部屋中に反響する。

「うるさいわね。別にお寶銭が少なくてか、入らないとか……まあ、ちよつとはあるけど、私はいつもの日常を、まったりさせるために、やりに行くんだから」

やれやれとため息をつきながら、雲夢はいつものお払い棒を取りに神社の中に入っていく。いつものように押入れを開けて、いつもの箱を開けて、いつものお払い棒を……

「あれ？」

本来そこにあるべきお払い棒は、そこには無かった。念のため蓋のほうも除いてみるが、もちろん、あるわけが無い。

「仕舞うところ間違えたかな？」

首をひねりつつも、今開けた箱の奥にある、色形が同じような箱や、比較的手前にある箱。結局最後は、目に映る全ての箱をひっくり返してみることが、そこにお払い棒は入ってなかった。

「おかしいな。確かに昨日仕舞ったはずなんだけど……」

とりあえず、昨日の自分の行動を振り返ってみることにする。

朝、いつものように、同じ時間に起きて、いつものように代わり映えのしない朝食を作る。食べる。そして、片付ける。

やはり他人からすれば、微妙な細部の違いなどわからない、改造巫女服を着こなして、一日の行動をはじめ。やはり布団を干して、掃除をして、お茶を飲む。

まったりとすこす。

朝食を作る。食べる。片付ける。お茶を飲む。

まったりとすこす。

魔理沙が遊びに来て、弾幕ごっここの相手をさせられる。もちろん勝つ。

魔理沙とお茶を飲む。

二人でまったりとすこす。まったりとすこす。そして昼寝する。

起きると日が傾いていて、夕食の準備に取り掛かる。という、弾幕ごっこに負けた朝ゲームをする魔理沙。を見て、まったりお茶を飲む。

夕食を食べる。魔理沙が、家のお米を食い尽くそうとしたので、御札で持ち付ける。

食後のお茶を飲む。

まったりとすこす。

眠くなったので、布団を敷く。

茶を現れる。宴會。

死屍累々。

片付ける。一日終了。

「私、昨日一日お払い棒使ってないじゃない。一昨日は——」

雲夢のはじき出した、一昨日の行動の結果は、宴會がない以外、昨日と同じだった。しかも、残念なことに、少なくとも二週間、同じ行動をしていた。

「まったりとすこすして、お茶飲んでいただけじゃない。これじゃあ、まるで無職じゃない」

「人はそれをニートと呼ぶ」

「うるさい」

「がぶっ」

復活した魔理沙を、御札で再び打ち倒す。あえて追撃を重ねることにした。絡み合う御札は、魔理沙の体を容赦なく締め上げた。

魔理沙は、しばらくジタバタ動いていたが、やがて動かなくなった。

「うーん、どこにいっただらう」

記憶を遡ったところで、答えは出てこない。流石に一週間も実の無い生活をしていれば、些細なことなど忘れてしまうものだ。それでも、なければならぬで落ち着かない。

「どうした、探してもか？」

「そんなところよ、とこで復活早いわね」

「人をのみたいないないで欲しいものだな。アレくらい私にかかれば、余裕だぜ？」

やれやれといった感じで、首を振る魔理沙。着衣の乱れを見る限り、そんなに余裕ではないらしく、強引に破いた御札が、服の端々に引っ付いていた。

「なによっっぽい自覚、あるじゃない」なんて思いつながら、お払い棒の件について、一応調べてみる価値はあるかもしれないと思つた。

「それで、お払い棒を探しているんだけど、魔理沙はどこにあるか知らない？」

「お前のお払い棒なんて、どこにあるか私の知ったこっちゃ無いな——つてお払い棒！？」

何とか引つ付いた御札をはがそうとして、盟誓苦闘していた魔理沙だったが、驚きすぎて、一緒に服の生地まで破ったことにも気付いていないようだった。

「それって、あのいつも持ってるお払い棒か？」

「そうそう。いつも片手に持っているやつ」

草香の口から出る現実とは、魔理沙が抱く微かな希望すら打ち砕く。その希望の上に立っていた魔理沙は、太陽を目指したイカロスが、父の注意を無視して、墜落したように、白黒自得の踵を背負い、真つ逆様に、現実という地面に、叩き付けられた。

それでもまだ現実はずらい。最も聞きたくは無いことだが、聞かざるを終えないこと。それを聞いたら、もう引き返すことなく、出来ないような気がした。

魔理沙は、覚悟を決めて、もっとも危険なことを口にした。

「それで、最後はお払い神は、どこにやった？ お前が片付けたのか？」

「あれ、魔理沙が片付けてくれたんじゃないの？」

うなだれる魔理沙。

「私は知らない。片付けた覚えは……無いぞ」

その魔理沙の苦虫を噛み潰したような表情を見て、草香は自分達のやったことの重大さに、やっとなげいたらしく、嗚然としていた。

魔理沙は片付けてない、草香も片付けてない。霊夢は、まだお払い神を見つけていない。ならば、お払い神は……

「じゃあ私のお払い神は、どこにいったのかしらね」

背後に、重なる言葉は生ぬるいほどの殺気が、ちりちりと項を、背筋を、これでもかと積りてくる。

目を見開いた草香。その姿は、雨の日に捨てられた子犬よりも哀れで、悲惨で、残酷なぐらい聞えていた。

振り向けない。振り向きたくない。視界は揺れる。舌、頭が麻が揺れていた。思考は止まる。正當に物事が認識できなくなった世界。真つ白な世界に魔理沙は包まれた。

魔理沙を見つけるのに時間は要らなかった。意外とも言えるぐらいの距離にいて、隠れるように何かをしている姿は、霊夢からすれば、「私がお払い神失踪の犯人です」と言っているようなものだった。

「草香……すーいーかー？」

上空にいるため、魔理沙の声は、森の中に吸い込まれ、ほとんど聞き取れなかったが、微かに「草香」を呼んでいるということだけは、聞き取れた。

その魔理沙の声に呼吸するかのようには、霧のようなものが萃まってきて、人の形を作っている。人のような出で立ちには、不自然すぎるほどの角が形成されている。

伊吹草香、種族は鬼。百鬼夜行事件の張本人で、密度を操る程度の能力を持った、ただの宴会好き。

「なに二人で、こそこそしているのやら。怪しいにも程がありすぎ」
宴会においては発起人と幹事の両方の二人ではあるが、宴会の相談なんて、こんなところで騒いでやる二人ではない。

むしろ堂々と、霊夢の目の前で打ち合わせて「じゃあ会場は神社で」と、伊吹草香ははじめから無い提案を持ちかけ、首を縦に振った覚えも無いのに、半日以内に宴会は催そうという二人だ。

だからこそ、余計に怪しかった。

幸いに草香は実体にならなっているため、こちらの気配を感じ取られることは無いだろう。二人に気付かれないように、地上に降り立ち、ざりざり会話の聞き取れる範囲の樹に、霊夢は身を潜める。

全てというわけではないが、二人の会話を聞き取るには十分すぎた。

少しだけ身を乗り出してみると、草香が面白そうに話をしてる姿が見えた。魔理沙はちよと舌を向けていて、表情はわからない。

「昨日はね、押入れから何か出てくるから、おかしいなあって思って聞いたら、霊夢のお払い神が出てきたでしょ。それを見て、面白いこと思いついたからって、いろいろやったよね。まずは、隙で山を作って神倒したり、ピーチフラッグみたいにしてたりして、どっちが速く捕れるかやっつたし。あれは物しいけど、魔理沙の任務だったよね。酔ってるから勝てると思つたのよ。あのあと盛大に、口から夢のスターダストレヴェアリエロを出してたけど。アレは可笑しかったなあ」

衝撃が脳天を突き抜けた。それぐらいショックだった。

まさか自分の見てないところで、そんなことをしていたという疎外感と、それに対する嫌悪感。

それでも、こういうのはいつものことで、一つ一つ気にしたら身が持たないし、何より突い話で済まされる。

霊夢にとつて、一番衝撃だったのは、自分のお払い神がそんなことに使われていたという事実。

使つて汚れるのは、わかっていた。霊夢も何かあるたびに、散々汚すようなことをしてきた。でも、こんなのは違う。絶対違う。こんな汚れ方は違う。こんな使い方は悪い。

——気持ち悪い。気持ちわるい。きもちわるい。きもちわるい。キモチワルイ。キモチワルイ。キモチワルイ。

誰から力が抜ける。体が落ちる。土がつくとか、白地が汚れるとか、そんなことを考える暇も無く、霊夢は崩れ落ちた。そんな自分を尻目に、草香は昨晚のことを面白そうに話す。

魔理沙の表情はわからない。そんなの知りたくない。

——それで、最後はそのお払い棒は、どこにやった？ お前が片付けたのか？

反射的に立ち上る。「私のお払い棒はどこ？」と霊夢は、次の萃香の言葉に全神経を集中させた。

「あれ、魔理沙が片付けてくれたんじゃないの？」

「私は知らない。片付けた覚えは無いぞ」

世界が反転する。

隠れていた朝から身を乗り出して、二人のいる方へ歩き出す。

まずは萃香が、霊夢に気付いた。魔理沙は、まだ霊夢に気がつかない。

考え事しているのだろうかと思つた。自分のしたことを正当化する、屁理屈でも用意するつもりなのかと思つくと吐き気がした。

萃香が怯えている。雨にぬれた寝れな小動物のように。この世の終わりのような表情を顔に貼り付けて。

魔理沙も萃香の異変に気付いたのか顔を上げた。でも振り向かない。いやきつと振り向けない。

喉が痛い。口が痺く、舌が動かない。そんな状態の中、霊夢はなるべく平然を装う。そして、

二人の目の前にして立つたとき、霊夢はやつと「目を口にした」

「じゃあ私のお払い棒は、どこにいったのかしらね」

この空間だけ時が止まった。木々のざわめきも、鳥のさえずりも、飛び交う羽虫も。全ての音が消えた。動きが止まった。

その中で霊夢だけが、この空間を動き回れる支配者となる。

「なんてことしてくれたのよ。この馬鹿」

世界の色が抜けたように。日常が反転する。

「うわあああごめんささい」

静寂を破ったのは、まずは萃香から。それと同時に世界は再び、時を刻み始めた。

萃香の体は薄く透明に、霧散し始める。密度を変えて、逃げようとしているのだろう。しかし、それは、これから無敵なあがきになる。

ここは場所が逆すぎた。ここはもう霊夢の領域だった。

「逃がさないわよ」

両手には何百枚もの御札。御札は、霊夢の手を離れると、四方八方に広がり、結界を形成し

て、霧となった萃香を問答無用に包み込む。

次第に収縮していく結界は、霧散しているはずの萃香を少しずつ凝縮させ、強引にもこの形に戻し、捕らえた。

それはまるで、札の牢獄。魔理沙を締め付けたときとは比べ物にならないほどの、圧倒的な力での制圧。

「だしてー！ お願ひ。出してよ霊夢ー」

悲痛な叫びを上げて、御札を剥ぎ取ろうと、もがく萃香。しかし、そんなもので敗れる結界ではなかった。それに、霊夢はもう萃香を見てなかった。魔理沙だけを見つめていた。

呆気ないほどの終場を魔理沙は、呆然と見つめていた。

「何か言うことが、あるんじゃないの？」

身を詰わせて、魔理沙は顔を伏せるが、少しずつ謝罪の言葉を口にする。

「悪かった。酔った勢いで、この体たらくだ。謝る以外の言葉は、浮かんでこないぜ……」

意外にも魔理沙は、素直に頭を垂れた。もつと、屁理屈でこねたり、反発したりと、見つとも無く足掻く気がした。

霊夢には、それがあまりに呆気なさすぎて、逆に毒気が抜けてしまった。

自分のやったことは実はとても無意味だった。無くなったお払い棒が帰ってくるわけじゃない。こんなことをやって、何かが変わるわけじゃない。

激情に囚われて、我を失ったことに、罪悪感と羞恥心と、そして自分に対する嫌悪感がこみ上げた。

霊夢が思惑だった。見る影もなく、沈んでいる魔理沙に、対抗する気力までも喪失させ、静

かになった萃香。

「あーもう。私も悪かったわよ。ちよつと頭に血が上りすぎたわ」

パチンと指を鳴らすと、萃香を捕らえていた御札がハラリと地面に落ちる。目を赤くしていた霊夢に、萃香は、勢いよく起き上がると、一目散に霊夢のところに駆け寄ってきて、抱きついてきた。

「ごめんね。ごめんね霊夢。お払い棒なくして、もう宴会で、変なことやらさないようにするから、許してー。宴会はやめないでー宴会はやらせてー」

宴会をやらぬという、選択肢は無いのだなと思ひながら、霊夢は小さい鬼の顔を撫でた。

それだけでとりあえず、萃香の体の硬さは取れて、落ち着いたようだった。

魔理沙のほうも、さつきよりは血色のいい顔をしていた。さつきまでの蒼白な顔は、自暴自

得にせよ、制裁を加えた霊夢のほうも、気分が優れない。

「さてと、とりあえず新しい目は見せまし、反省もしているようだから、お払い棒を無くしたこ

とは、赦してあげる。でもこういうことはもうやめること。いくらお酒に酔ってたからって、こんなこと普通ならやっちゃだめなこととさらいわかってるんでしょ？ まったく、姿が見えないときは警戒しないと駄目ね」

力なく頭垂れる二人を自覚、雲夢は苦笑いをした。これじゃあ、まだ自分が悪いみたいだと思いつながら。

もう帰ろう。なんか疲れたし、お茶飲んで昼寝でもしよう。そう思いながら、雲夢は神社へと向かって歩き出した。

後ろの二人もそれに続いて、着いてきた。でも距離があった。

歩いている時の、この微妙な距離が、今日の事件で出来た心の距離だ。

歩みよるうと思えば、自分から歩み寄れるけど、原因が自分じゃないのに、どこがおかしくて、納得できなくて、雲夢から、どうしても近寄ることが出来なかった。

その距離を雲夢は、とても淋しく思えた。

霧雨魔理沙は、家路を辿る雲夢の後ろを草香と一緒に歩いていた。

赦してもらえたのに、雲夢は赦してくれなかったのに、いつものように雲夢の横を歩けなかった。

今の自分に、雲夢の横を歩く権利は無かった。雲夢が気にしてなくても、自分のほうに負目があった、素直に横を歩くことが出来なかった。

それは草香も一緒のようで、何度も顔を上げて追いつこうとしていたが、その度に何度もあきらめたように俯いて、雲夢の背中ばかり眺めていた。

あのとときの雲夢の、怒った表情のさらに奥にある泣きそうな顔が、目に焼きついて消えない。自分ももしかして、雲夢の踏み込んではいけない部分に、踏み込んでしまったのか。そう思つて、魔理沙は苦渋の表情を浮かべた。

そして、ひとつの決心をした。お払い樽をなんとかしよう。雲夢に、これ以下赦してもらいたいわけじゃない、喜んでもらいたいわけでもない。ただ自分のけじめのために、自分がふざけて出来た代償を払うために、お払い樽をなんとかしよう。

それが何とかなったとき、自分はまた雲夢の隣を胸張って歩けるのだ。そのときまで、この距離の淋しさを覚えておこう。

自分達を照らす太陽だけが、いつもと変わらぬ日常で、ここだけがいつもと違う非日常を告げていた。